

レバノン 日常化する爆撃に抗い、分断を乗り越える未来へ

レバノンでは3月以降、イラン情勢に端を発したヒズボラをめぐる対立とイスラエルによる激しい攻撃により、人道危機が深まっています。南部や首都ベイルート南部郊外では空爆が続き、100万人を超える人びとが避難を余儀なくされています。物価や家賃は高騰し、仕事を失う人も増えるなかで、社会の分断も深刻になっています。

ベイルートで暮らすパルシク現地スタッフのアンソニーは、2006年の戦争、2019年の経済危機、2020年のベイルート港爆発など、幾度も困難を経験してきました。しかし、今回の戦争で、二度と経験したくないと思っていた現実に再び直面しています。

ベイルートでは、頭上を飛ぶドローンや戦闘機の音が絶えず響き、「大きな爆発音以外、耳に入ってこなくなっていた」とアンソニーは言います。ヒズボラの拠点があるダヒエ地区への爆撃は日常的で、「感覚が麻痺していた」と振り返ります。し



▲南部から避難してきた人びとが身を寄せる避難所（山岳レバノン県／4月29日）

▶食料バスケットを受け取る笑顔の男性（山岳レバノン県／5月2日）



かし4月初め、ベイル

ートで大規模攻撃が起きた際、爆撃のうち2件は友人の家から100メートルも離れていない場所で発生しました。幸い彼の友人たちは無事でしたが、「この戦争の中で初めて心の底から恐怖を感じた」と話します。

「レバノン南部では昨年からずっと同じことが起きていました

が、私にとっては目の前で起きていることではなかったため『どこかで起きているいつものこと』として受け止めてしまっていました。でも、日常的に爆撃が起きることをそのように感じてしまうこと自体、そもそも異常なことと気づかされました」

また、戦争は社会の分断も広げていて、不安から避難民の受け入れを拒否する地域も出ており、広場や道沿いでテント生活や車中泊生活を送る人もいます。しかし、「レバノンが外国勢力に支配されてほしくない」という人びとの願いは共通しています。

パルシクは現在、レバノン国内で避難を余儀なくされた人びとへの緊急支援を続けています。これからも、食料などの生活必需品の配付や避難所の衛生環境改善を通じて、人びとの命と暮らしを支えるとともに、分断を乗り越えた先の未来へ、現地の声を届けていきます。

（糸井）



4月8日の大規模攻撃により崩壊する建物（レバノン市内中心部）

中東危機（レバノン）へのご寄付



（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

目次

レバノン 日常化する爆撃に抗い、分断を乗り越える未来へ…… 1
パレスチナ ガザ 戦禍を越えて——畜産農家の新たな挑戦／ヨルダン川西岸 土地とのつながりを育む循環型社会づくり…… 2
シリア 小さなビジネスが支える再出発／東ティモール カカオに新たな希望を託して…… 3
ミャンマー 空爆や戦闘から逃れ生きる人びと／タイ国境地域 それぞれの視点を重ねて…… 4

みんなふえ（葛飾区）仲間とつくる居場所／能登 地域と歩む、共につくる居場所…… 5
フェアトレード スリランカ 事業開始から15年——新たな挑戦／フェアトレード 日々のこと…… 6／東ティモール コーヒー生産者組合で倉庫の増床開始／紅茶ツアー開催報告／ちょっと寄り道…… 7
パルシクからのお知らせ 法人連携レポート／東ティモール独立回復24周年を祝う主催オンラインイベント／遺贈寄付のご案内…… 8

■ガザ 戦禍を越えて——畜産農家の新たな挑戦

2025年10月に成立したイスラエル・ハマス間の停戦は、2026年5月時点であらうじて維持されていますが、現在もイスラエルによる散発的な攻撃は続いています。イスラエルとアメリカによるイランへの軍事攻撃の陰で、ガザ市民は、大規模な戦闘が再開するのではないかという不安な日々を過ごしています。

ガザ地区では人口約210万人のうち9割が今なおテント生活を余儀なくされており、停戦で合意されていたガザ内への支援物資の搬入も半分程度にとどまっています。あらゆる物資の不足により、

人びとは依然として深刻な栄養不良と劣悪な衛生環境のもとでの生活を強いられ、高い感染症のリスクにさらされています。

パルシッは、不安定な物流状況と慢性的な食料不足にあるガザ域内で、持続的な食料生産が可能になるよう、羊農家



配付した飼育用の資材で鶏小屋を作り、鶏50羽の飼育に励む農家

(この事業は日本 NGO 連携無償資金協力の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。)

への畜産支援を続けています。34世帯は羊の飼育を継続している一方で、戦争で羊を失った36世帯には、新たに鶏約50羽と飼育に必要な資材を配付し、養鶏による畜産の再開を支援しました。鶏や卵の販売を通じた継続的な収入の確保とともに、地域への食料供給につなげています。また、羊農家の女性を対象とした、心理ケアや栄養改善のためのワークショップも実施しています。

人びとの声

鶏の飼育をするモハンマド・サーレフさん

私は戦争前から畜産で生計を立てていました。開戦直前には羊の飼育を本格的に始める予定でしたが、大規模攻撃で自宅も羊小屋も破壊され、長くテント暮らしを続けています。畜産の再開を諦めていたところ、パルシッから鶏を受け取り、もう一度始めることができ、とても嬉しいです。すでに雄鶏22羽を売って収入を得ることができたので、子どもたち

に必要なものや繁殖用のひよこを買いました。これから鶏を増やして、卵や鶏を地域の人びとに販売していきたいです。

鶏50羽と飼育に必要な資材を受け取り喜ぶモハンマド・サーレフさん



■ヨルダン川西岸 土地とのつながりを育む循環型社会づくり

ヨルダン川西岸地区では、ガザの未曾有の人道危機の陰で、イスラエルによる移動制限や入植地の拡大、入植者の暴力の激化により、人びとの生活は厳しさを増しています。ナブルス県北アシーラの住民の多くはオリーブ農家であると同時に、公務員などの兼業によって生計を立てています。しかし、イスラエルによる経済制裁の影響で収入が半減し、不安定な状態が続いています。

パルシッは「循環型社会づくり事業」において、2024年度から現地の女性団体と連携し、台所から出る生ごみから堆肥を作り、それがまた食物の生産につながる流れを市民に実感してもらえ

るよう活動を進めています。堆肥の作り方や活用方法についてのワークショップ



2026年2月に実施したワークショップの様子

人びとの声

家庭菜園活動に参加するジャルワさん

水タンクや灌漑用パイプ、苗の支援を受け、ジャガイモ、レタス、トマト、ファックス（きゅうりの一種）、パセリなどを育てています。自分でも点滴灌漑用のパイプを増やしましたが、以前から生ごみを畑にまいていましたが、堆肥の適切な使い方を学び、作業がより楽しくなりました。私は教師ですので、この経験を学校でも活かして、生徒と一緒に土とのつながりを育む活動をしたと考えています。



ジャルワさんとレモンの木

の開催や家庭菜園の技術支援などを具体的には行っています。ワークショップの参加者は「子どもの頃から家族が行っていた農作業が、食料を得る手段であるだけでなく、心の安らぎにもつながっている」と話します。また、家庭菜園の技術支援では、生ごみや鶏糞を畑にまいていた経験を持つ参加者が、農業専門家による適切な施肥方法や農薬に頼らない害虫管理について助言を受けながら、循環型農業に挑戦しています。

(この事業は地球環境基金および地球環境日本基金の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。)

シリア 小さなビジネスが支える再出発

シリアではアサド政権の崩壊から1年半が経った今も、長年に及ぶ戦争の爪痕が深く残り、故郷へ戻った人びとの多くが、仕事や収入手段を失ったまま厳しい生活を送っています。

パルシツクは、帰還した人びとが多く暮らすハマー県で、小規模ビジネスの起業支援を行っています。

現在活動している村々は都市部に近い地域にありますが、特に帰還した人びとにとって仕事を見つけることは難しく、家族を養うために過酷な肉体労働に頼らざるを得ない状況でした。これらの活動

人びとの声

タイル磨き業を再開したイブラヒムさん

私はアレppoでの長い避難生活中、日雇いの肉体労働で家族を支えてきましたが、2023年の大地震で家が倒壊し負傷しました。そして働けなくなり、収入手段を失いました。その後、ハマー県の村へ戻り、パルシツクの活動に参加して、生業としていたタイル磨きを再開しました。プログラムにより人生を立て直す力を取り戻し、事業は軌道に乗り、2人の従業員を雇っています。生活費や子どもたちの学費もまかなえるようになりました。



タイルを磨く
イブラヒムさん



乳製品づくりに取り組む参加者へのインタビュー

(この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからの寄付で実施しています。)

は人びとの生計を立て直し、さらに農村地域の経済を再び動かす力にもなっています。

参加者が始めた事業はさまざまです。

スイーツや焼き菓子を作って販売する女性のお店は村で評判となり、スタッフも村を訪れるたびに注文するほどです。乳製品づくりや牛の飼育など、農村の暮らしに根差した仕事を始めた人びともいます。化粧品販売や美容サービス、衣料品販売のほか、バイク修理店や洗剤・石けん製造などを準備している参加者もいて、女性の活躍も目立っています。

活動を通じて、人びとが生活を立て直し、「戻った故郷で暮らし続けたい」と思える環境づくりを私たちは支えています。(アンソニー)

東ティモール カカオに新たな希望を託して

東ティモールの南海岸に位置するマナウトウ県バリケ郡ナタルボラ農業技術学校の先生たちと良質なカカオ豆の試作に取り組んだ2025年。京都のプレマールシエ・カカオレトラボさんの協力を得て、東ティモール産カカオが美味しいチョコレートを作るに足る品質であることがわかりました。2026年1月には東ティモール産カカオを使ったチョコレートの日本での販売を開始。出来上がったチョコレートを学校の先生方やカカオ生産農家のみなさんにも届けると、これまでまったく市場価値のなかったカカオがチョコレートになって戻ってきたと、喜びもひとしおでした。

ただ、カカオの木の高齢化や生産性の低さは課題です。カカオだけではなく農家も高齢化しており、若い世代とこれからのカカオ産業をどう盛り上げていくかという課題もあります。ナタルボラ農業



ナタルボラ農業技術学校ですくすくと言つカカオの苗

人びとの声

ナタルボラ農業技術学校の
ジョベンシオ・マゲノ先生

2007年に学校が6万本のカカオ苗を農家に配布した時、私も1000株を受け取って3つの畑に植えました。カカオの木は大きく育ちましたが実を買ってくれる市場はなく、手入れもせずに放置していました。同じ時期に苗を植えた農家のほとんどはお金にならないカカオの木を切ってしまったようです。今回、私の畑で採れたカカオから作ったチョコレートが、はるばる日本から飛行機に乗って戻ってきてくれました。カカオには価値がある、ということもっと農家に伝えたいです。



チョコレートを受けて
つて満面の笑みのジョ
ベンシオさん(左端)

技術学校では学生の実習期間を利用して3000本のカカオ苗の育成を開始し、学校の試験農地に2ヘクタールの新しいカカオ畑をつくろうと動き始めています。私たちもこの試験的な取り組みから得た教訓を、広くカカオ栽培に意欲を持つ農家に広げ、コーヒーで築いた協同組合モデルを応用しながら、良質な東ティモール産カカオ豆がコーヒーに次ぐ東ティモールの輸出産品となるよう、取り組んでいきます。(伊藤淳子)

■ミャンマー 空爆や戦闘から逃れ生きる人びと

2025年12月から2026年1月の

総選挙実施に向けて国軍が勢力を広げるため、2025年秋ごろから少数民族地域への攻撃を強めていました。選挙後も変わらず空爆やドローンによる攻撃が続いています。その結果、多くの人が家が失い、少しでも安全な場所を探し逃げ込んだ森やジャングルの中に避難民キャンプを設け、生活を続けています。人びとはいつ空爆や攻撃が起こるか分からない恐怖を感じながら、十分な支援が届かない厳しい環境での生活を余儀なくされています。



避難民キャンプ内に作られた防空壕。避難先で再び空爆にあうケースも多い



丁寧に手入れされた研修参加者の家庭菜園

人びとの声

家庭菜園の参加者Aさん

家庭菜園から収穫できる野菜や豆などのおかげで、栄養のある食事がとれるようになり、毎日の食べ物を心配する必要がなくなりました。近所の人たちも食料の心配をしなくて済むようになればと思います、研修で習ったことを伝えていきます。

人からは、「頻発する戦闘や空爆で住んでいた家を破壊され、収入もなくなりました。家族5人分の十分な食料を手に入れることができなくなり、食事の量や回数を減らして何とか生き延びていました。食料を受け取れたことで、身体的にも心理的にもストレスが減りました」との声が聞かれました。また比較的安全な地域にある避難先で生活する人たちは、家庭菜園の研修と家庭菜園を始めるための農具や野菜の種など農業資材を渡し、自分たちで食料を生産できるようサポートをしました。家庭菜園を始めた参加者たちの中には、多くの収穫を得て家庭の食料事情が改善できただけでなく、収穫した野菜を周囲の家庭へ分けたり、市場で売って収入を得られたりした人もいます。

■タイ国境地域 それぞれの視点を重ねて

戦闘や弾圧を逃れるため、多くの子どもたちがミャンマーから隣国タイへ避難してきています。こうした子どもたちが学ぶ場として、タイ国境地域ではミャンマー移民コミュニティやタイで暮らすカレン族など地域の人びとが中心となり「移民学習センター（学習センター）」が運営されています。しかし、その多くは寄付に頼っており、財政的に厳しい状況に置かれています。それでも、子どもたちの生活と学びの場を守ろうと、教職員や保護者、地域の人びとが力を合わせて運営を続けているのが現状です。



それぞれの教科書の必要部数を確認する先生たち

パルシックは、提携団体のスタッフからの報告や現地への出張を通して、各学習センターの状況や寮での暮らしを見せてもらいながら、教職員や提携団体スタッフと対話を重ねてきました。現場で何が課題となっているのか、どのような環境であればよりよい学びにつながるのか——それぞれの視点を持ち寄り、共に考えることを大切にしていきます。学習センターごとに置かれている状況は異なるため、その実情に応じて柔軟に内容を変えてい

くことで、より役立つ取り組みにつながると考えているからです。例えば、ある学習センターを訪問した際、授業の様子を見学する機会がありました。先生は教科書の内容を黒板に書き写し、子どもたちはそれを書き終わるのを静かに待っています。話を聞くと、教科書は先生用に1冊あるだけで、それを使い込まれて文字がかすれている状態でした。そのため、まずは黒板に内容を書き写し、子どもたちが読めるようにする必要がありますとのことでした。この状況では、先生の負担が大きいくだけでなく、授業で内容を教える時間も限られてしまっています。しかし、こうした環境は長く続いてきたため、当初の聞き取りでは課題として挙がっていませんでした。実際に授業の様子を見て、先生たちと対話を重ねる中で初めて見えてきたニーズに対して、教科書を配布することができました。これからも先生や保護者、地域の人々、提携団体とともに、学習センターの子どもたちを支える一員として一緒に活動を続けていきます。



配付した教科書を使って授業をしている様子

みんなかふえ 仲間とつくる居場所

東京都葛飾区のコミュニティカフェ

「みんなかふえ」では、子ども食堂、フードパントリー、カフェ、イベントの運営を通じて、地域の方々が交流し、安心して過ごせる居場所づくりを目的とした活動をしています。

カフェは現在、月・木・金の週3日の営業で、パルシツクのコーヒー・紅茶・ハーブティーなどに加え、ボランティアの方と考えたフードメニューも提供しています。

4月から毎週木曜日は、仕込みから調理、接客まで、ボランティアの方が運営を取り仕切ってくれることになりました。仕込みは週に1回、定期的に参加しているボランティア数名が役割を分担してスムーズに作業が進んでいきます。

仕込みが終わった後は、みんなでティ



カフェの仕込み風景

人びとの声

みんなかふえボランティアの堀内さん

10年ほど前のこと、夕方のテレビ番組で「子ども食堂」の特集が。「これは何？」と調べて近所のみんなかふえを発見して早速登録し、ボランティアをスタートしました。今日までみんなかふえが続いているのは大勢のボランティアの力、と密かに思っています。

趣味で育てているハーブをボランティア活動の合間にお茶にして楽しんでもらい、気付けば私にとっても心地よい居場所になっています。

ご自宅で育てているハーブ



ータイム。作業後のお茶をしながらのしゃべりも大切な時間です。時にはカフェのお客さんも交じっておしゃべりを楽しんでいます。

仕込みの作業はイベントではなく準備作業ではありますが、生き生きと活動しているボランティアの方を見ると、集まる場所と共有する時間がゆるやかに居場所を形づくっているのを感じます。今後もカフェの運営体制の強化を図るべく、一緒に活動してくださるメンバーを大募集中です！

(小柴麻実)

(この事業は皆さまからのご寄付で実施しています。)

能登 地域と歩む、共につくる居場所

能登半島地震から約2年半経ち、被災

地では大きく被災した建物の解体がおおよそ完了し、至る所に更地が広がります。一方で、道路の修復工事が進み、港の建設工事が始まった様子に、復興は建設フェーズに入ったことを実感する日々です。能登町の被災した施設の一部を借りてスタートした常設の居場所作り「なごみプロジェクト」は、2月4日にオープン1周年を迎えました。1周年記念のくじ引きで無料ランチ券を手にして「やったー！」と喜ぶ皆さんの姿に、無事続けてこられたことに安堵しました。

月に1度の子ども食堂では、毎回100名を超える方が来てくださり、ボラン

人びとの声

なごみを想う釣谷さん

冬に大雪が降った後、駐車場の除雪をかってくださった釣谷さん。近くの仮設住宅に住み、いつもなごみを気にかけてくれます。「イベントがあったり、大人数で食事ができるなごみは他にはない場所。周知をしつかりすればもっと人が来る。麺類だけのメニュー



地区の区長を務める釣谷さん。面倒見がよく頼りにされている

でもいいから日曜も祝日も開いてくれたらいいのだけど」と率直な意見をくださるのも「なごみを想って」とのこと。



毎回子ども食堂ボランティアに来てくださる地域の女性たち

(この事業は、ジャパン・プラットフォーム、ALAMCO SRI 社会貢献ファンド(愛称: あすのはね)の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。)

ティアの方に配膳などを手伝っていただき、何とかこなしています。子ども大人も笑顔で食事を楽しむ様子をみるたび、地域にとってかけがえのない場所になっていることがわかります。

運営を支えているのは地元スタッフやボランティアだけではありません。餅つき大会では地元の防災士会が協力してくださり、オープンガーデンお茶会では、地域の方から素敵な鉢植えをお借りして、なごみの庭を飾りました。壊れた看板を修理してくださる方、「営業中」ののぼり旗がたっていないことに気づき立ててくださる方など、たくさんの方々が活躍してくださる方々に支えられています。地域の皆さんと引き続き一緒に運営していくことで、なごみが皆さんの日常の一部になっていく、そんな居場所作りをこれからも続けていきます。(新宅聡子)

from
Sri Lanka

事業開始から15年——新たな挑戦

スリランカ・デニヤヤで、小規模紅茶農家グループエクサが有機茶栽培に取り組み始めて15年。化学肥料に頼らない農業は容易ではありませんが、農家たちは着実に歩を進めています。

その土台を支えるのが堆肥づくりの技術です。2024年6月にJICA草の根協力事業が始まって以来、国内外の研修で知識を積み重ねてきました。昨年11月末から12月前半には三重県の専門家のもとで6日間の研修を実施。農家の代表ら計4名が座学と実習で従来の手法の課題を発見し、帰国後はその学びをパルシクのコンポストセンターや農家宅でのデモンストレーションを通じて仲間たちに共有しています。

茶以外の農産物の共同出荷や加工品の製造・販売の可能性も模索しています。農業専門家とともに有機農産物の販路開拓を行う中で、地元でよく採れる檳榔樹の実やココナッツオイルが出荷候補として浮上。有機茶以外にも農家の暮らしを支える道を



三重県でのコンポスト研修の様子

探っています。

「続けるのは難しい」と感じる農家がいる一方、新たにボーデニヤ村から22世帯が有機栽培に参加しました。2026年3月には買取価格も引き上げられ、農家の意欲に追い風が吹いています。15年の積み重ねが、少しずつ確かな変化をもたらしています。

(谷川望美)

(この事業はJICA草の根技術協力事業の業務委託を受けて実施しています。)

商品のご紹介



・有機 JAS 認証取得・

スリランカ産 有機アールグレイ紅茶・有機ルフナ紅茶
(それぞれリーフ/ティーバッグ)

エクサが生産する有機茶はフェアトレード商品としてオンラインショップParMarcheで販売しています。

ボーデニヤ村のソーマウィーラさん

これまで18年間茶栽培をしてきましたが、パルシクが環境にも人にも優しい有機茶栽培のプロジェクトをしていると聞き、昨年から有機茶栽培に取り組み始めました。化学肥料に頼らずに栽培するのは大変ですが、このプロジェクトに参加して茶葉の買取価格が上がってよかったです。いつかは自分たちの有機茶工場を持って、有機紅茶や有機栽培をもっと広めていきたいです。

人びとの声

パルシクのフェアトレード

パルシクのミッション「人と人が助け合い、支え合い、人間的で対等な関係を築く」という考えのもとに、フェアトレード事業では、商品の生産や流通、消費が市場の価値だけに依存するのではなく「人間的な交流と信用に基づくフェアな取引」を大切にしています。

オンラインショップ パルマルシェ

ParMarche

<https://parmarche.com>



オンラインショップ
パルマルシェ

フェアトレード 日々のこと

中東危機はパルシクの活動地で暮らす人びとの日常にも影を落としています。フェアトレードの取引でも、スリランカから届くはずのアールグレイ紅茶の原料・ベルガモットの入荷が遅れたり、包材や輸送費の値上げについて、玉突きのように急な連絡を受けたりしています。改めて、国際的に多くのモノが行き交い、つながっていることを実感しています。

さて、今年は4月から3年ぶりにコーヒーゼリーの販売を開始しました。リニューアルしたゼリーはすると柔らか。カフェ・ティモールらしいほろ苦さ、

爽やかな酸味と喜界島産ザラメ糖の優しい甘さ、なんといっても香り高いのが特徴です。

例年のツアーで滞在するマウベシ郡の集落は、標高およそ1,500m。夜は10℃近くまで冷え込みます。よく冷やしたコーヒーゼリーをひと口。目を閉じれば星がまたたく寒空の下、マウベシの仲間がほほえみかけます。

(ロバーツ圭子／竹内玄)

新商品



カフェ・ティモール
コーヒーゼリー



東ティモール コーヒー生産者組合で倉庫の増床開始

パルシックの「カフェ・ティモール」シリーズは、アイナロ県マウベシ郡のコカマウ（コーヒー生産者協同組合）産の生豆を輸入し、日本で焙煎からパッケージングまでの加工をしています。2002年の東ティモールの独立当初よりパルシックは、技術面、組織面にわたるコーヒー産業への支援を、協同組合コカマウを通じて行ってきました。フェアトレードとして日本へ輸入されたコーヒーには、生産物への対価に加え、コカマウが地域社会の発展のために使途を決定するソーシャルプレミアム※がさまざまな取引先から支払われています。2025年度のコカマウ年次総会で、これらを集落への道路修繕、橋梁工事、上水道修繕などのインフラ整備や、新しいコーヒーの苗づくり、組合員への有機たい肥の提供、コーヒーツーリズムなどに使うことが決定されました。

パルシック提供のソーシャルプレミアムは、コカマウの倉庫の増床に使われることになりました。2016年に建設されたコーヒーの一次保管倉庫は、組合員が約1,000世帯にまで増えて手狭となり、増床を求める声が高まっていました。コーヒー収穫期を間近に控え、コカマウ事務局と組合員が一丸となって建設作業に取り掛かっています。

（植岡浩彦）



写真右奥、緑色の壁面の建物が現在の倉庫。新築部分の1階をコーヒー保管倉庫として使用し、2027年以降のソーシャルプレミアムを使って上層階を建て増す計画

※フェアトレード製品の取引において、通常の買取価格に上乗せして支払われる追加資金のこと。生活環境の改善や持続可能なコミュニティ発展に活用されます。

紅茶ツアー開催報告

デニヤヤのホームステイ先での料理教室



デニヤヤ

2月初旬の8日間、「美味しい紅茶に出会う旅 in Sri Lanka フェアトレード紅茶の産地を訪ねる」を開催しました。国際協力に関心を持つ学生さん2名を含め、参加者は全5名。農家宅でのホームステイや農園・加工場見学を通して、小規模生産者組合エクサが取り組む有機茶栽培や、デニヤヤでの暮らしについて学びました。農家とツアー参加者との座談会では、有機農業の将来についての活発な議論があり、自前の加工場を持ちたいという農家の夢も語られました。

ツアー参加者の感想

負担は大きいけど利益は小さいという有機農業の状況は、日本もあまり変わりません。ただ、生産者さん同士で、『茶葉が加工される工程も見たい』『堆肥づくりをもっと学びたい』など話が盛り上がる場面があり、前向きに取り組んでいってほしいことが伝わりました。（A.K.さん）



京都市南部にある有機栽培のコーヒー生豆を自家焙煎で行うこだわりのお店、有限会社グリーンアイズさん。先代から続くこのお店は、京都をはじめ関西各地のカフェや自然食品店に焙煎豆を卸しています。2代目の森口渉さんは、今も先代から引き継いだ焙煎機を使い、自動制御に頼らない、経験を生かした直火焙煎で豆を仕上げます。隣家との距離が近い住宅地での焙煎には、とても長い煙突が大活躍。長すぎて掃除が大変というご苦労も聞きました。東ティモールの店舗でも焙煎機と煙突のメンテナンスは課題ですが、機械の手入れもおいしいコーヒーをお届けする上で大切であることを改めて気づかされます。店内でいただいたコーヒーは、すっきりとした味わいで心に残る一杯でした。



温かみのある店舗入口



焙煎士の森口渉さん

店舗情報

有限会社グリーンアイズ

〒612-0029 京都市伏見区深草西浦町8-111 TEL: 075-643-9352

法人連携レポート ● 丸の内にある IT 企業での講演と社内販売会

5月のフェアトレード月間にあわせて、「公平で持続可能な社会の実現」を掲げる企業と協働しました。会場となったのは、社員の皆さんが利用される開放感のあるカフェテリアスペース。活動地のミャンマーをテーマに講演するとともに、フェアトレード商品の社内販売会とミニワークショップを開催しました。



ミャンマーコーヒー「Zomi」

パルシックで販売中のミャンマーコーヒー「Zomi」を実際に味わっていただきながら、ミャンマーの情勢や戦闘下で生きる人びとの暮らし、Zomiが誕生した背景についてお話をしました。社員の皆さんが傾きながら耳を傾けてくださる姿が印象的

でした。

「タイに逃れた子どもたちの中には、家族と会えない子もいることや、その背景がわかった」との声や、「毎年、講演会に参加しています」との声をお寄せいただき、Zomiのアイスコーヒーを片手に「癖がなく美味しいです!」と感想をいただきました。

今後も、企業との協働イベントなどを通して、活動地の現状や人びとの置かれた状況を、フェアトレード商品とともに多角的に届ける活動を進めていきます。

講演中の様子



東ティモールの独立回復24周年を祝う主催オンラインイベント



5月20日、「独立記念日に集まろう! 東ティモールの今とこれから」を開催し、100名を超える方々と東ティモールの独立回復から24周年をお祝いする時間を共有しました。

第1部はディリでの記念式典に参加した様子の紹介からスタート。独立回復から24年が経った現在、独立記念日に対する受け止め方は世代によって異なります。3名への街頭インタビュー動画を交えながら、歴史的背景や世代ごとの教育の違い、ASEAN加盟などについて、独立当時から東ティモ

ールで活動が続けてきた事務所代表の伊藤淳子がお話しました。

第2部の活動報告後のQ&Aコーナーでは参加者に声を出してご質問いただき、双方向の交流も生まれました。最後はスクリーン上で記念の集合写真をぱちり。参加者それぞれに東ティモールのコーヒーやチョコレートも楽しんでいただきながら、お祝いの雰囲気の中でイベントを終えました。

2027年には独立回復25周年を迎える東ティモール。来年もまたみなさんとお祝いできるのが楽しみです。

5月20日にむけて路上で東ティモールの国旗を売っていた子どもたち

遺贈寄付のご相談をお受けしています

大切なご遺産を、想いとともに未来へ繋げる「遺贈寄付」をお受けしています。少額のご寄付、活動地やプロジェクトを指定したご寄付も承っております。まずはお気軽にご相談ください。

- ▶ 遺贈によるご寄付
遺言によるご自身のご遺産からのご寄付
- ▶ 相続財産からのご寄付
相続人もしくは受遺者の相続財産からのご寄付
- ▶ お香典返しによるご寄付
お香典やお花料へのお返しに代えてのご寄付



遺贈寄付の詳細については、パルシックのホームページをご覧ください。

<https://www.parcic.org/support/izokifu.html>

民際協力ニュースは年に2回(6月・11月)にパルシックが発行するニュースレターです。送付の希望、送付先の変更、送付の停止については、office@parcic.org までご連絡ください。